

## 26

幕末の頃、利根川流域に広凡に販売されていた  
秘伝のめぐすり「家傳開明散」, 「家傳青眼膏」

青木 道夫

青木クリニック

幕末の眼科医高野敬仲は秘伝のめぐすり, 「家傳開明散」「家傳青眼膏」を作り販売していた。このことは、いまだ眼科医会に知られていない。今回、高野家より公開された医学資料の中にあつた版木を刷ったところ、クスリの効能書がでてきたので報告する。江戸に近い関宿藩という要所にめぐまれ、また利根川・江戸川という二つの河川という交通の利便性により、クスリの販売経路は広範囲にわたっていたと思われる。

高野敬仲は常州河内郡生板村早井(茨城県河内町)の生まれで、下総関宿桐ヶ作(千葉県野田市)の河岸にて開業していた。三代目敬仲の時より、医業活動の中心を関宿桐ヶ作村の河岸に移し、開業していたと推定される。三代目敬仲の子、石寿は茨城県取手市に現在の薬局にあたる支店を開業し、商売をしていたことが判明した。桐ヶ作と取手とは相互に連絡をとりあい、商売の活動範囲を拡大していたことが、高野家の文書からよみとれる。

さて、秘伝「家傳開明散」は、一包72銅(約2,000円位)で販売されていた。

- 一、内障外障諸証の病眼に吹薬にしてよろし、一日に三度ツツかけ暫時眼を消息べし。
- 一、掛くすりして、あしき眼病ハ左にするす。  
○天行赤眼 ○痛如神祟 ○痛如針刺 ○眼目乾燥
- 一、外障廿四証あり、服薬、點薬、掛薬、及、手術外療にてなほるものなり、なをらぬも、またこれあり、左に記  
○黒翳如珠 ○大小背赤脉 ○久年爛眩風 ○瞼毛倒睫 ○努内攀睛 ○眼瞼瘤及瘰子 ○小兒斜視眼 ○飛塵入眼 ○小兒疳眼 ○麻疹内攻 ○痘瘡内攻入眼

「家傳青眼膏」は一貝40銅(約1,000円)で販売されていた。

- 一、目薬突け點ふは乳汁にて、溶解耳かきの先に少くツツつけ、下瞼の裡面へ一日三度ツツ點目を閉暫時休居てよろし○内障外障及もろもろの眼病に點て吉 ○外障廿四証あり 服薬・點薬・掛薬及手術外療にてなをるものなり、なをらぬもまたこれあり、左に記す  
○黒翳如珠 ○大小背赤脉 ○久年爛眩風 ○瞼毛倒睫 ○努内攀睛 ○眼瞼瘤及子 ○小兒斜視眼 ○飛塵入眼 ○小兒疳眼 ○麻疹内攻 ○痘瘡内攻
- 蘭名 プロイム
- 一、小兒生瘡世上に愚なる父母ハ、油薬などをつけ、ひばゆなど、又ハ、しろ水などであらい、早速なをるをよしといたす、人ままこれあり、熱氣内にこもり、眼にあかミ、やに出大病眼となる小兒、あまた有之ておそるべき事也
- 一、此薬用方ハ二三才の小兒ハ毎夜白湯にて一粒ツツ用ゆべし、十四五才ニ相成候得バ二三粒位ハ用てよし、此薬大人小兒ニかかわらず、悪敷腫物一切によし
- 一、小兒すべて腹に下りある時ハ用てよろしからず きん物
- 一、す、さけ、油氣、さかな類、めん類、餅るい、きなこ、まくハ瓜、梨、唐もろこし

## 毒吸膏

- 一、目の赤ミはれ、やに出、痛つよく頭痛右の症ニ、此の、かう薬よろし、付方ハひやめきのすりたてへ、三日ニはる、三度目を七日ばかりとらすニすて置く。あく水の多く出るをよしとす、湯に五七日入べからず、小兒の胎毒目 大人にもよろし

本國常州河内郡生板邑早井里

出張 下総関宿在桐ヶ作村

文化九申秋九月

高野 敬仲

當時出張桐ヶ作村にて眼療内外及手術仕候